

異文化コミュニケーションにおける 会話スタイル相違に関して

— 日・中の学生初対面会話スタイル比較考察 — （その1）

ト 雁^{*1}, 星見友香^{*2}

1. はじめに

人々は、無意識のうちに自文化を盛り込んだ思考を持ってコミュニケーションをすることが多く、そして異文化に接触した時に初めてそれに気付かされることがしばしばある。

学生指導に当たり、よく「(自分側からのアプローチに対して)日本人学生からあのような対応で来たのは思わなかった」とか、「中国人は会話を強要するように感じる」や「相手にどうアプローチすれば一番良いか」とか、海外語学研修で中国に行っている間や、大学に来ている中国語圏留学生を受け持っている間に、学生からの感想や相談を受けることがあった。正に、異文化交流で感じられる他文化に対する好奇心と探求心、また、違う世界を知る喜びが潜められる若者たちの知識欲求が感じとれる。

ゼミでの異文化コミュニケーション関係の文献等学習を通して、問題意識を持ちながら日本人と中国人の学生のコミュニケーション行動と意識、また観念等に関して興味を持ち、それぞれどのような体系的なものがあるかと研究に取り組みたいという意欲を示す学生がいて、海外語学研修の機会を利用して一緒に「会話スタイルの違いに関する調査」を手掛けた。実践と結び付けて、理論的に日本語と中国語話者間に存在する会話スタイルと対人コミュニケーション様式の相違を探り、その様態を明らかにすることを目的とし、作業を始めた。

本文では、今まで手掛けた調査と一定の結果、また、これから目指す方向を述べることにする。

2. 先行研究

異文化コミュニケーション比較関係の研究をするにあたり、まずは文化人類学者E.ホルの高・低文脈文化論を復習することからスタートしたい。

^{*1}淑徳大学総合福祉学部 准教授, ^{*2}淑徳大学総合福祉学部

2-1. 高文脈文化 (High Context Culture) と低文脈文化 (Low Context Culture)

エドワード・T・ホール (Hall, 1976) がコミュニケーション研究上広く知られている理論—高文脈文化 High Context (HC) と低文脈文化 Low Context (LC) 説を提示した。

文脈—コンテキスト (Context)—は、コミュニケーションにおいて、発話者と参与者の言語外部を取り囲む物理的、社会的、心理的、文化的概念であり、コミュニケーターに大きく影響を与える。ホールのHCとLC文化理論 (Hall, 1976, p92) では、高文脈は、同じ社会や集団の人々が長年において相互影響され、作り上げられた習慣や理解など、特に明白な表示がなくてもお互いに理解できる言語文化環境を指し、低文脈は人々が短期間で或いは特別な理由で関係する中、お互いに違う文化背景や思考様式、信仰を持ち、言語理解には特に明白な説明や表現を必要とする言語環境を指す。

ホールによれば、文化は人々によって共有された「行動プログラム」であり、「コミュニケーション」を意味する。同じ文化のメンバーは同じ情報と記号、付き合い方や意味形成の方法を共有しているが、文化によって異なる。高文脈文化は、ある社会や集団において、長期的に相互影響をして築き上げた、明示しなくても理解できるものに対し、低文脈文化は、コミュニケーターお互いの、言語理解は明示的説明や表現が必要であるという。

コミュニケーションという行動プログラム実行中の情報伝達と意味理解と高・低文化文脈の関係に関して、ホールは図示で説明した。

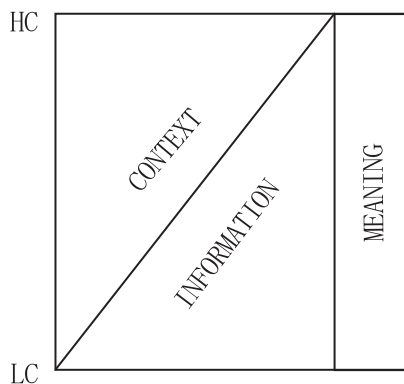


図1. Context and Meaning (コンテキストと意味) ¹

図1で示したように、文脈依存度が高いほど、意味が言語による情報伝達より文脈に潜む度合いが高く、低文脈文化になるほど、意味が情報に内在し、言語による伝達が多くなる。

ホールの分析では、中国は高文脈のトップであり、アメリカは低文脈だが、目盛でいうと中で一番低いのはドイツ系スイスだという (Hall, p79)。また、ホールは日本が高文脈文化

であると論じた。(pp95-99)

ホールの理論を言語において考えると、一般的に日本語の語法は高文脈的であり、ある程度コミュニケーションする情報は既に人々の間で共有していることが認識されるので、曖昧な表現が伝達されうる高文脈文化言語であると認識される。しかし、文化的多様性を持つ国とその低文脈言語使用との間に完全な相関関係があるとは言い難いと思われる。

例えば、日本語と中国語において考えれば、HC文化は「察し」や「一を聞いて十を知る」言語文脈であり、一方、LC文化はより「言語」に頼るという点では、果たして、日本語と中国語はホール「メモリ」の高文脈トップに並ぶと言えるのだろうか。

ただ、先に言った「文化的多様性を持つ国と低文脈言語使用との間に完全な相関関係」が一定しないという考えが成り立てば、日本語においても、中国語においても、それぞれの高と低の文脈関係があることにより、相互不一致が存在するのも説明がつく。よって、ホール理論で考えれば、コミュニケーションの場の（言語）コードスイッチングにおいて、低文脈から高文脈へのシフトはより難しく、即ち、低文脈文化背景を持つ話者が高文脈文化の言語環境に入ると、説明が欠けている場合には戸惑いが多く経験されるということになる（ト, 2005）。これに関する研究は続けたい。

2-2. 言語表現と非言語表現

言語はコミュニケーションの重要要素であり、言語表現に、言語的 (verbal) と非言語的 (nonverbal) 行動がある。人と人との意思伝達は、多くの場合言語的と非言語的行動が同時に介在して成り立ち、しかも、非言語的行動は言語的より伝達量が多く、また、心理的表現が多く含まれる (芳賀1979, p120)²ため、重要な役割を果たしていると広く指摘されている。

非言語行動は、(メタメッセージともいう) 表情、ジェスチャー、服装、対人距離、また、パラ言語、周辺言語 (paralanguage) などといった、ことばと随伴して出される音のトーンやイントネーションなどがある。最近パソコン通信に流行っている絵文字は文字のメッセージに加えたノンバーバルコミュニケーション表現である。

本文で取り扱う調査項目の「話し相手との談話時距離」や「会話終了や話題交代」、また「会話態度」といった問題は、非言語表現の範疇で、自文化要素 (後述あり) の盛り込まれたコミュニケーション行動のスタイルとして見られる。

2-3. 日本人と中国人の思考・コミュニケーションの特徴

金が『日本人・中国人・韓国人』(2003) で、中国語には「口才好 (話す才がある)」ということばがあるが、「聞く才がある」ということばはないと述べた。しかし日本語では「聞

き上手」ということばが頻繁に使われ、つまり、日本人は聞き覚えの才能があるということ、相手のいうことばを傾聴することに長けているという。日本人が聞くことを好む「耳の文化」だとしたら、中国人と韓国人は話すことを好む「口の文化」であり、彼らは相手のことばを聞く前に、まず自らの主張を表明するような表現の仕方を取り、何とか説得して、相手を制圧したり感服させたりしようとする。中国人と韓国人は、「表情を多彩に変化させ、大声で抑揚の起伏をつけて、熱弁を奮ってこそ自己主張をすべて表現したことになる」が、一方、日本人は口数が少なく、絶えず微笑みを浮かべて頷いて聞くことにばかり熱中していることは、昨今のテレビドラマでも観察でき、判断されるのではないかという指摘があった。(金, 2003, pp234-235)

一方、久米らが次のように示唆した。日本人は議論において課題達成よりも「場」や人間関係或いは会話を楽しむことを重視する傾向がある。意見の表し方として、始めは意見を強く言わず、相手があいづちを打った後で再びターンをとり、意見を明確に述べるケースが多く、「相手が自分のことをどう思っているかということをつつも気にしつつ、相手の反応によっては安心して自分の意見を断定的に述べる」傾向があり、前の人の意見を補足しながら共同で会話を展開させている傾向があるという。

また、日本人はストレートに意見を述べた後、自分自身で笑う場面も観察され、これは、「ストレートに意見を述べることで場が緊張するのを、笑い等の方法で防ごうとしている」と思われるが、「議論の流れに乗ることを重視し、その場その場で、相手の発話に補足したり、明確化したり、付加する発話」、更には、「言いよどみや言いさしも、極めて頻繁になされ、参加者が共同で作り上げ、流れに乗っていくという傾向」が見られるといった。「割り込みの頻度に関しては、中国とアメリカが多く、沈黙は日本が一番長い」、また、「一人一人がある程度の時間を占有して議論を進めていくという点では中国人とアメリカ人の間である程度の共通性が見られ」、日本人のコミュニケーション様式が、中・米と大きくかけ離れていることが明らかになったという。(久米ら, 2000)

2-4. 会話スタイルと異文化間コミュニケーション

重光 (2005) が会話スタイルにはことばでは表現されない様々な情報、すなわちメタメッセージがより相手に伝えられ、それは自分の文化で予測されることを土台として解釈されると指摘した。話し手と聞き手が文化・社会的背景を共有しているとメタメッセージが正確に伝わりやすく、心地好い会話になるが、異文化間や異言語間のコミュニケーションではそれらがあまり共有されないのが、心地の悪さにつながるという。(重光, 2005)

また、重光 (2005, p221) は次のように述べた。会話スタイルを作り上げている最も主要な要素は、声の大きさ、声の高低、話す速さ、ポーズといった音声的特徴であり、言語表

現の選択（語彙レベル、方言、インフォーマル表現、フォーマル表現など）、会話の始め方、終わり方、話題選択、身振りや表情など、会話する際に伴うあらゆる要素が会話スタイルを構成するともいえる。

同じ言語を話す人々の間でも、職場、地域、民族など属しているグループによって相応しい話し方がそれぞれ異なり、同じ人物でも、会話を行うグループや場面ごとに相応しい話し方が少しずつ違い、それに応じて話し方を使い分けている。また、会話スタイルによってことばで表現されていない背後の意味だけでなく、仲間意識や話し手の態度など多くのメッセージが伝えられている。けれども、聞き手の解釈に依存する部分が多いので、共有されている場合は、話し手と聞き手が同じようにメタメッセージを解釈するので、正確に伝わり、心地好い会話となる。しかし、共有されていない部分が多い相手との会話では、メタメッセージを異なった捉え方で捉えてしまいがちで、会話の進め方や相手の態度に違和感を覚えたり、どのような意味で言っているのか分かりにくかったりすることが多く、それが誤解や心地悪さを生むと重光氏の示唆があった。（重光, pp221-224）

重光は、初対面の日本人とアメリカ人が英語で行った会話から、日本語と英語の会話スタイルの違いが会話の心地好さ、心地悪さにどのように影響しているかを分析した。アメリカ人は「理解を踏まえて会話する」「話し手は意見をはっきり言う」「人間関係を親しさの度合いの高い関係に設定する」という文化・社会的背景を土台にしているため、日本人に口をはさむ機会を与えないほど早口でよくしゃべり、細かいことでも詰問するように質問をし、日本人の発言が終わるまで待たず話題を変えるなどの行動が起きると考察した。圧倒されるようなことばの量と息もつかないアメリカ人同士の会話には日本人が無視されているような心地悪さがあると分析し、一方、日本人の文化・社会的背景には「人間関係や意見の対立回避を優先する」「相手の話を察しながら聞く」「上下関係を重視しそれぞれが立場をわかまえる」があるため、アメリカ人からは、日本人はしゃべらず、アメリカ人に対して質問もせずジョークにも反応を示さないように見え、また不適切なところでコメントすることに心地悪さがあるという分析がなされた。（重光, p 235）

重光氏の指摘のように、日本人もアメリカ人もそれぞれの文化・社会的背景に適した然るべき会話スタイルをしたため、そのスタイルの相違が大きく、上記の「心地悪さ」が出たのだが、これは互いに相手に与えた結果的なものと理解できる。同じように、日本人と中国人話者間においても、このような会話スタイル相違があるが、それはどのように存在しているかを考えたい。

3. 研究方法

今年度天津大学夏期語学研修期間中と後学期開始後に、筆者たちは日・中学生間において

会話スタイルの違いに関してアンケート調査を実施し、またその後フォローアップ面接調査を行い、日本人と中国人学生間の会話スタイル相違とその原因について検討した。これからは以上の調査結果に基づき、次の仮説を巡って、研究を進めたい。

- (1) 中国と日本は、文化論においての高文脈文化と同様に認識されながら、言語文化の差異が大きいため、初対面会話では中国人学生は日本人学生より積極的なアプローチと会話維持を務めるのに対し、日本人学生にはその努力は相対的に少ない。
- (2) 親交が深まる学生交流の中盤から会話開始は中国人学生が多く、会話終了は傾聴する傾向がある日本人学生が多くつとめる。

他に、日・中学生が会話をする際にそれぞれ意図的に自分自身の言動をコントロールしている重点が違うため、初対面会話時に見られる会話スタイル相違やアプローチ方の違いが心地悪さの起り得る原因となることが考えられる。これは次のステップで研究を進めたい。

以上に関し調査結果と観察事象を把握した上で日・中異文化コミュニケーション様相を理論的に検討していく。

3-1. 調査方法

アンケート調査は2回実施したが、第1回目は、対象者の日本人学生は、語学研修に参加している淑徳大学生・愛媛大学生に対して行い、中国人学生は、天津大学の学生にお願いした。その結果、1回目は合計40人の中国人と日本人学生の回答データを集めた。第2回目は、日本人学生は、淑徳大学の異文化理解の講義を履修している学生たちと中国語Ⅲを履修している学生たちに行い、中国人学生は、淑徳大学日本語学校に留学している学生たちに対して行った。その結果、2回目は合計87人の回答を集めた。

フォローアップ面接調査は、日本人学生に関しては、過去の同語学研修参加者も含む語学研修参加経験者学生11人と語学研修参加経験のない13人に依頼し、中国人学生は、天津大学と蘇州淑徳日本語学校在学学生7人と淑徳大学在学留学生1人に依頼し、個別に研究室での面談やメール通信により実施した。

3-2. 調査内容

アンケート調査では、会話をする際、自分自身が他者からどのように見られているかに注意を払い、自分自身の言動をどのように意図的にコントロールしているかについての設問をし、調査紙を作成した。

本研究では、初対面の日本人学生と中国人学生の学生交流時などに見られる会話スタイルの違いやアプローチの仕方が原因で起り得る心地悪さの程度について、また、研究テーマ

の初対面会話スタイルについての相違度を測った。また、面接調査では、質問紙調査での結果をより掘り下げるため、また、更なる研究データを得るために、日本人学生男女24人と中国人学生男女8人に直接質問し、回答してもらった。

アンケート調査紙には、所属学科や学年など基礎質問以外に、第1回目では25項目の設問をし、第2回目では18項目の設問をした。それぞれ5段階（「全く望ましくない」「あまり望ましくない」「どちらともいえない」「やや望ましい」「非常に望ましい」）選択を問い、1問につき○を1つ付ける方法をとった。（関連設問内容は次章での結果分析で表示し、全内容は今回提示しないことにする。）

フォローアップ面接調査では、日本人学生に次のような設問をし、自由回答をしてもらった。

- 問1. 会話時に相手との身体的位置関係はどのくらいが望ましいですか。
- 問2. あなたが思っている望ましい位置に対して相手が近づいたり遠ざかったりすることにどう思いますか。
- 問3. 面白くない会話になってきたらどうしますか。
- 問4. 自説を言い張ることにどう思いますか。
- 問5. 会話が途中で途切れそうになった時あなたはどうしますか。
- 問6. 会話中の物理的視点の位置についてどの位置が望ましいですか。
- 問7. 自分から初対面の相手でも話しかけますか。
- 問8. 会話の際にされたくない態度はありますか。

中国人学生には次のような設問をし、自由回答してもらった。

- 問1. 你认为对话时与对方的距离多远最好？
（あなたが会話する時相手との距離はどの位が望ましいですか。）
- 問2. 会中对方接近你或者远离你时，你会怎么想？
（会話する時相手があなたに近付いたり遠ざかったりすることに対してどのように思いますか。）
- 問3. 如果聊天变得没趣了，你会怎么做？
（もし、面白くない会話になってきたらあなたはどうしますか。）
- 問4. 对于对方坚持自己的主张的事你怎么想？
（相手が自説を言い張ることにあなたはどう思いますか。）
- 問5. 如果突然话题中断，你怎么办？
（もし、会話が突然途切れるようになったらどうしますか。）
- 問6. 聊天中与对方的站立角度，多少为最好？

(会話中の相手との立つ角度はどれ位が望ましいですか。)

問7. 你和初次见面的人也很积极地讲话吗？

(あなたは初対面の相手でも積極的に話しかけますか。)

問8. 与人交流时, 有最讨厌的态度吗? 那是什么？

(交流している時に特にされたくない態度はありますか。それはどんなことですか。)

4. 調査結果と分析

4-1. アンケート調査に関して

第1回目での調査は、日本人学生（淑徳大学・愛媛大学）20人と中国人学生（天津大学）20人に対して行い、第2回目での調査は、日本人学生（淑徳大学）50人と中国人学生（淑徳日本語学校）37人に対して行った。男女比の内訳は以下の表の通りである。

表1. 調査人数と男女比の内訳

| | | |
|-----|--------------|--------------|
| 1回目 | 淑徳・愛媛大学（日本語） | 天津大学（中国語） |
| 男 | 12人 | 16人 |
| 女 | 8人 | 4人 |
| 2回目 | 淑徳大学（日本語） | 淑徳日本語学校（中国語） |
| 男 | 28人 | 20人 |
| 女 | 22人 | 17人 |

4-1-1. 分析方法

アンケート調査結果について、今回は回答者人数と回答者割合でデータをまとめ分析していく。特にアンケート調査で有意性が出ていく項目についてはフォローアップ面接調査の回答を合わせて分析する。また、すべての質問項目ではなく、会話スタイルの「心地好き」や「心地悪さ」要因関連質問項目のI-6（第1回目調査）（第2回目の調査では4番になるので、II-4と命名する。以下同。）、I-10（II-7）、I-23（II-16）、I-24（II-17）、I-25（II-18）を取り上げて（各設問項目は次節でそれぞれ挙げることにしながら）分析していく。また、日・中間の全体的比較をするため、それぞれの回答者人数に対し、一旦第1回目の調査と第2回目の調査の人数を合わせて表示した。しかし重要なのは、日本語による語学研修先の天津大学で実施した1回目調査と後学期日本で実施した2回目調査の結果に違いがあり、それは興味深い考察になり得るが、これからの研究課題にしておく。

4-2. アンケート調査結果と分析

先ずI-6（第2回目の調査ではII-4）の「初対面の相手であっても、好印象を持たれ

るために自分の良いところをアピールするか」に関する調査結果を見る。

4-2-1. 「初対面の相手に自分の良いところをアピールするか」に関して

「非常に望ましい」と「やや望ましい」と回答したのは日本人学生24人（35%）、中国人学生32人（56%）であった。逆に「あまり望ましくない」と「全く望ましくない」と回答したのは日本人学生22人（31%）、中国人学生29人（29%）であった。日本人学生の場合は、「どちらともいえない」の「ケースバイケース」のような回答が一番多いが、中国人学生の場合は5割以上の回答が初対面の相手でも、好印象を与えるアプローチが望ましいと回答している。

表2. 「初対面の相手でも、好印象を持たれるために自分の良いところをアピールするか」の統計結果

| | 日本人学生（日本語） | | 中国人学生（中国語） | |
|---------------|------------|-------|------------|-------|
| | 回答者人数 | 回答者割合 | 回答者人数 | 回答者割合 |
| (5) 非常に望ましい | 4 | 6% | 16 | 28% |
| (4) やや望ましい | 20 | 29% | 16 | 28% |
| (3) どちらともいえない | 23 | 33% | 9 | 16% |
| (2) あまり望ましくない | 17 | 24% | 25 | 25% |
| (1) 全く望ましくない | 5 | 7% | 4 | 4% |
| 合計 | 70 | 100% | 57 | 100% |

予想したのは、中国人学生には「非常に望ましい」の選択が更に多く、逆に否定的回答が少ないことだったが、語学研修先で実施した1回目調査の回答が全体数に影響したと考えられる。これについては次の段階で検討したい。

4-2-2. 「自分の意思などを相手に伝えるか」に関して

I-10（第2回目の調査ではII-7）の「自分の意思や欲求、感情は、言葉に出して相手に伝えるか」に関する調査結果は表3に表示する。

「非常に望ましい」と「やや望ましい」と回答した日本人学生は31人（45%）、中国人学生は26人（46%）と大して差が見られない。しかし、「あまり望ましくない」と「全く望ましくない」と回答した日本人学生は13人（19%）、中国人学生は24人（39%）であり、日本人学生のほぼ2倍になっている。

先の先行研究（金，2003）では、「中国人は相手のことばを聞く前に、先ず自らの主張を表明するような表現の仕方を取って何とか説得し、相手を制圧したり感服させようとしたり、表情を多彩に変化させ、大声で抑揚の起伏をつけて表現する」とあったが、今回の調査

表3. 「自分の意思や欲求、感情は言葉に出して相手に伝える」の統計結果

| | 日本人学生 (日本語) | | 中国人学生 (中国語) | |
|---------------|-------------|-------|-------------|-------|
| | 回答者人数 | 回答者割合 | 回答者人数 | 回答者割合 |
| (5) 非常に望ましい | 11 | 16% | 9 | 16% |
| (4) やや望ましい | 20 | 29% | 17 | 30% |
| (3) どちらともいえない | 26 | 37% | 9 | 16% |
| (2) あまり望ましくない | 13 | 19% | 13 | 23% |
| (1) 全く望ましくない | 0 | 0% | 9 | 16% |
| 合計 | 70 | 100% | 57 | 100% |

では実際に自分の意思や欲求をことばにして相手に伝える行為が望ましいとは思っていないように見えた。先行論と違ったのは、この調査には有意性調査法が欠けたのか、それとも他に何か違う理由があるかと思われるが、後のフォローアップ面接調査でも「自分の欲求や意思をことばにしている」ことに関し、中国人学生は気にしない（望ましくない）という結果になったので、調査の範囲や対象などの差ではないかと思われ、今後の課題となる点である。

4-2-3. 「初対面の人と会話が途切れないように間を保つ努力するか」に関して

I-23 (第2回目の調査ではII-16) の「初対面の人と話す時進んで話題を探し、間を保つ努力するか」に関する調査結果は表4に示す。

表4. 「初対面の人と話す時進んで話題を探し、場を保つ努力をするか」統計結果

| | 日本人学生 (日本語) | | 中国人学生 (中国語) | |
|---------------|-------------|-------|-------------|-------|
| | 回答者人数 | 回答者割合 | 回答者人数 | 回答者割合 |
| (5) 非常に望ましい | 16 | 23% | 17 | 30% |
| (4) やや望ましい | 24 | 34% | 17 | 30% |
| (3) どちらともいえない | 22 | 31% | 12 | 21% |
| (2) あまり望ましくない | 8 | 11% | 5 | 9% |
| (1) 全く望ましくない | 0 | 0% | 6 | 11% |
| 合計 | 70 | 100% | 57 | 100% |

アンケート調査で「非常に望ましい」と「やや望ましい」と回答した日本人学生40人(57%)、中国人学生34人(60%)であった。割合ではわずかに中国人学生の方が「望ましい」と考えているが、「あまり望ましくない」と「全く望ましくない」と回答した日本人学生8人(11%)、中国人学生11人(20%)であり、中国人学生の方が倍近く多くなっている。ということは、

日本人学生の方が会話に積極的で、会話の維持努力は中国人学生よりしているという結果になり、筆者が予想した仮説とは異なってくるように見えたが、これは質問の仕方と回答者の理解とのずれがあると見て、果たしてどうなのかとフォローアップ面接調査で確認すべきだと判断した。

フォローアップ面接調査において、問5「会話が途中で途切れそうになった時あなたはどのようにしますか」では、3人の日本人学生は「初対面の人だった場合、話題を探して話を続けさせようとするが、親しい友人の場合だと話題が途切れて沈黙の状態にすることに問題ない人だったら流れに任せ、話題が思いついたら話しを続けたり、沈黙の状態にすることに問題がある人だったら必死に話題を探して話を続けようとしたりする」と、会話する相手によって変わると回答している。中国人学生のほとんどは「初対面であろうと親しい友人であろうと、話題を探して話を続けようとする」と回答し、むしろ「話題が尽きることがない」という回答も来ている。筆者の仮説では、「(1)日本人学生は中国人学生に比べて会話維持努力は少ない」となっているが、面接調査によって筆者の仮説を裏付ける結果となったといえよう。本項目関連のアンケート調査内容改善が期待されると考える。

4-2-4. 「自分からよく会話終わらせるか」に関して

I-24（第2回目の調査ではII-17）の質問は「自分から対話を終わらせることはよくするか」に関する調査であるが、結果を表5に示す。

「非常に望ましい」と「やや望ましい」と回答した日本人学生は17人（24%）、中国人学生は15人（27%）であり、また「あまり望ましくない」と「全く望ましくない」と回答した日本人学生は26人（23%）、中国人学生は18人（24%）であった。肯定的と否定的とでは大差はなかった。「どちらともいえない」という「ケースバイケース」の回答が目立った。もしくは、日本人学生も中国人学生も自分から対話を終わらせることに対し特に気にしないかもしれないと考えられる。

表5. 「自分から対話を終わらせることはよくするか」の統計結果

| | 日本人学生（日本語） | | 中国人学生（中国語） | |
|---------------|------------|-------|------------|-------|
| | 回答者人数 | 回答者割合 | 回答者人数 | 回答者割合 |
| (5) 非常に望ましい | 2 | 3% | 5 | 9% |
| (4) やや望ましい | 15 | 21% | 10 | 18% |
| (3) どちらともいえない | 37 | 53% | 24 | 42% |
| (2) あまり望ましくない | 14 | 20% | 13 | 23% |
| (1) 全く望ましくない | 2 | 3% | 5 | 9% |
| 合計 | 70 | 100% | 57 | 100% |

しかし、学生交流での筆者の観察では、会話の半ばからしばしば日本人学生から終わらせる様子が見受けられた。日本人学生は会話を保つ努力や会話を終わらせるしぐさの理由には、中国人の自己主張に対して、自分が頷いて聞く役に回されていることにあると考えられるだろうか。フォローアップ面接調査においても、例えば問3.「面白くない会話になったらどうするか」についても日本人学生は、「適当に相槌を入れたりしながら聞き手に徹する」や「相手がまだ話してたいようなら話させて自分は聞き手になる」などと回答している。

一方、中国人学生は「新しい話題に変える」や「二人に共通する話題に変える」などと回答し、話を変えてまた盛り上がるようにしようとする傾向があると思われる。筆者の仮説「(2) 親交が深まった学生交流の中盤から会話開始は中国人学生が多くつとめ、会話終了は日本人学生が多くつとめる」となるが、これは、フォローアップ面接調査の結果によって立証されていると思われる。お互いに共通するような話を探したり話のネタが尽きることのない中国人インフォーマントだから、会話開始の多くをつとめるという意見であったのか、それとも、普遍的に相手に親近感を示す意欲、又は、むしろ前述重光氏指摘の「人間関係を親しさの度合いの高い関係に設定する」というアメリカ的観念意識が中国人にもあり、この文化・社会的背景を土台 (v. s. 本文p119) にしているためなのかと、大変検討価値のあることである。

4-2-5. 「交流の場で積極的に相手を探し会話のアプローチをするか」に関して

今回のアンケート調査に対する最後の分析項目になるが、I-25 (第2回目の調査ではII-18) 「パーティーや交流会場の場で自ら話の相手を探しアプローチするか」に関する調査結果を分析してみる。結果は表6の通りである。

「非常に望ましい」と「やや望ましい」と回答した日本人学生は25人 (36%)、中国人学生は22人 (49%) であった。また、「あまり望ましくない」と「全く望ましくない」と回答した日本人学生は22人 (32%)、中国人学生は15人 (27%) であった。中国人学生の方が、僅かながら自

表6. 「パーティーや交流会場で自ら相手を探し会話のアプローチをする」の統計結果

| | 日本人学生 (日本語) | | 中国人学生 (中国語) | |
|---------------|-------------|-------|-------------|-------|
| | 回答者人数 | 回答者割合 | 回答者人数 | 回答者割合 |
| (5) 非常に望ましい | 12 | 17% | 9 | 16% |
| (4) やや望ましい | 13 | 19% | 13 | 23% |
| (3) どちらともいえない | 23 | 33% | 20 | 35% |
| (2) あまり望ましくない | 16 | 23% | 10 | 18% |
| (1) 全く望ましくない | 6 | 9% | 5 | 9% |
| 合計 | 70 | 100% | 57 | 100% |

ら相手を探してアプローチする傾向が見られ、「望ましくない」と思っているのは僅かながら日本人学生の方が多い。

ところで筆者が語学研修中、夜に街道など散策している時に、ダンスレッスンのようなサークルがあちらこちらにあり、その場を通りすがりの人でも参加することができるのを見受けた。これも、中国ではそのような文化と社会的行動基準価値観の存在があることから簡単に自ら相手を探してアプローチすることができることだと考えられる。何年前かに、日本でもパラパラのダンスブームが起こり、至る公園でパラパラサークル、俗に言う「パラサー」があった。しかし、限られた者しか参加していないように思われるし、今現在の日本では見られない。またサークルに入るには誰かしらの仲介など受けてから入るような形が多く、普通は通りすがりでも進んで入るようなことはほとんどない。もしかしたら、日本の茶会の心得から生まれた「一期一会」ということばは実は中国ではより大きなスケールで、或いは違う次元で理解され得るか、思えてくる。というよりこれは、日・中文化間の対人親密度の価値観における違いではないかと考えられる。

この「文化的対人親密度の価値観相違」に関して、今回は次節で少々触れることにしておく。

4-3. フォローアップ面接調査の結果と考察

ここでは、フォローアップ面接で得られた回答とそれに対する考察を試みるが、1回でできる可能性と紙幅を配慮し、面接調査結果の代表として、日本人学生の語学研修に参加した学生（以下「語学研修参加者」と、語学研修に参加していない学生（以下「語学研修非参加者」とする）、また、中国人学生についてランダムに1人ずつ取り、回答を取り上げることにする。

4-3-1. 語学研修非参加者Yさんの回答

問1. 会話時に相手との身体的位置関係はどのくらいが望ましいですか。

- 回答. 1mの間隔をあけて向かい合った状態。

問2. あなたが思っている望ましい位置に対して相手が近づいたり遠ざかったりすることにどう思いますか。

- 回答. 離れられると心の距離を置かれた気がして寂しくなる。逆に近づかれると、向かい合った状態のままでは不快、むしろ居心地悪くなる。

問3. 面白くない会話になってきたらどうしますか。

- 回答. 視線が泳ぐ。

問4. 自説を言い張ることに対してどう思われますか。

- 回答. 相手の意見を全く聞かないのであれば不快であり, あまり望ましくない。

問5. 会話が途中で途切れそうになった時あなたはどうしますか。

- 回答. 別の話題を持ってくる。

問6. 会話中の物理的視点の位置についてどの位置が望ましいですか。

- 回答. 相手の顔。

問7. 自分から初対面の相手でも話しかけますか。

- 回答. 雰囲気を見て, 自分と違う性格だったり, すでにグループができている場合は話しかけにくい。けれど, 一人でいる子や自分と同じ性格だと話しかける。

問8. 会話の際にされたくない態度はありますか。

- 回答. 会話の最初から目を合わせてくれなかったり, ケイタイをいじりながら話しをする態度。

この回答者の特に興味深い回答は問2と3の項目だと考える。まず, 問2の回答では, 遠ざけられることに対しては心の距離を置かれる寂しさを感じ, 近づかれると向かい合った場合には不快に思い, 居心地悪さを感じると回答している。この回答者には何故かと追及したところ, 遠ざかるのは相手が自分を置いて別のところに行くような感覚と同じ気持ちになるからであり, 向かい合った状態で近づいてくるのは自分の領域を侵されそうなので, 何かあったのか不安になるからと回答している。また, 向かい合った状態で近づかれるなら横隣に来てほしいとも回答した。

次に問3では「視線が泳ぐ」と回答しているが, 目をきょろきょろさせるというよりも, 別の場所を見て時々相手の顔に視点を戻すが, あまり視点を相手の顔に置かないと回答している。もし, 会話中の物理的視点において相手の顔や目を見ない人と会話していたならば, 自分の「面白くない会話だ」というアピールが無視されることになる。だとしたら, 相手が話し終わるまでずっと聞いていなければいけない。これに関して追及したところ, もし相手がアピールに気がついていない場合, 話題を切り上げるような発言や行動を示すと回答された。

4-3-2. 語学研修参加者Mさんの回答

問1. 会話時に相手との身体的位置関係はどのくらいが望ましいですか。

- 回答. 隣の席の位置から机を挟んで向かい側ぐらい。

問2. あなたが思っている望ましい位置に対して相手が近づいたり遠ざかったりすることにどう思いますか。

- 回答. 近づく分には構わない。遠ざかるのであれば, 声が聞きとれなくなるため多少

追いかける。しかし、自分と話したくないという態度であれば追わない。

問3. 面白くない会話になってきたらどうしますか。

-回答. 相手がその話題を話したいのであれば止めずに聞き手に徹する。

問4. 自説を言い張ることに対してどう思われますか。

-回答. 明らかに間違っていることを言い張ったり、押しついたりするのは望ましくない。逆に、自説も何も言わないというのも話す気があるのかと相手に思う。

問5. 会話が途中で途切れそうになった時あなたは どうしますか。

-回答. 特に何もしない。無言になっても話すネタを見つけたら話す。

問6. 会話中の物理的視点の位置についてどの位置が望ましいですか。

-回答. 目を見ないというのは失礼かと思ひ、意識して目を見るようにしている。

問7. 自分から初対面の相手でも話しかけますか。

-回答. 初対面の人に対して自分以外知り合いの場合、話しかけにくい。けれど、互いに初対面なら話しかける。

問8. 会話の際にされたくない態度はありますか。

-回答. オチの長い話を永遠にされるのと、一本調子のお話をされるのは困る。

この学生の回答で特に興味深いのは、問2と問7である。まず、問2で「近づく分には気にせず、遠ざかるには追いかける」という回答に関して興味を持った。何故追いかけるのかと聞いたが、相手が遠ざかることによって声が聞きとれなくなるからといった。また、「どうしたのかと気になるので相手があからさまに回答者から遠ざかる場合以外は追いかける」と回答していた。遠ざかる相手に対して追いかけるという回答には、他の回答者に比べ積極的なアプローチのように思われる。海外研修に参加して、異文化を含めて他文化と他者に対し、積極的な考え方を持っているところに日本人学生として他と差が出ていると思われる。

次に、問7では「初対面の人に対して自分以外知り合いなら話しかけにくい。互いに初対面なら話しかける」というのも面白い。同じ初対面の人でも、相手側に知人などが同伴の場合は話しかけにくく、回答者にも相手にも同伴者がいない場合は話しかけると分けている。他の回答者にも、「話しかけなければならない状況と話しかけなくても構わない状況」を分けて考えるという回答が多かったのは興味深い。

4-3-3. 中国人学生T君の回答

問1. 你认为对话时与对方的距离多远最好? (あなたが会話する時相手との距離はどの位が望ましいですか。)

-回答. 能互相清楚地听到对方说话的距离。(話がはっきり聞き取れる距離。)

問2. 会話中**对方**接近你或者**远离**你时, 你会怎么想? (会話する時相手があなたに近付いたり遠ざかったりすることに対してどのように思いますか。)

-回答. 接近: “或许他没听清?” 远离: “大概我靠的太近了吧?” (近付いた場合, 相手が聞き取れなかったのか心配する。遠ざかった場合, 自分が近付きすぎたのかなと思う。)

問3. 如果聊天变得**没趣**了, 你会怎么做? (もし, 面白くない会話になってきたらあなたはどうしますか。)

-回答. 干点别的吧, 比如UNO。(違うことをやりだす。たとえば, UNOをやる。)

問4. 对于**对方**坚持自己的**主张**的事你怎么想? (相手が自説を張ることにあなたはどのように思いますか。)

-回答. 我自己的想法不强迫别人接受。(自分の意見を他人に押し付けることをしない。)

問5. 如果突然**话题**中断, 你怎么办? (もし, 会話が突然途切れるようになったらどうしますか。)

-回答. 点菜吧! (料理を注文しようか。)

問6. 聊天中与**对方**的**站立**角度, 多少为**最好**? (会話中の相手との立つ角度はどれ位が望ましいですか。)

-回答. 面对面坐着。(座った時は顔と顔。)

問7. 你和初次见面的人也很**积极**地**讲话**吗? (あなたは初対面の相手でも積極的に話しかけますか。)

-回答. 还挺积极的吧, 我**话题**还挺多的。(積極的に話しかける。私は話のネタが多いから。)

問8. 与人交流时, 有最**讨厌**的**态度**吗? 那是什么? (交流している時に特にされたくない態度はありますか。それはどんなことですか。)

-回答. 有。**对方**接起一个**电话**, 然后就开始**讲**个没完, 完全**无视**我的存在。(ある。会話している最中に相手が電話に出たりして, 話が終わらず, 私の存在を忘れること。)

問7の回答に関して, 回答者の「話のネタが多い」ということもあるが, 相手が初対面の人でも違う状況であっても, 積極的に話しかけるということは日本人回答者には見られなかった。問3に対して, 「違うことをする」と回答しているので, 一見, 会話維持努力がなさそうだが, 「たとえばUNOをする」ということで重い会話の場を一度変えて, 新しく会話の場を作ることによって話を心地好く続けさせることができると考えているのではないかと思われる。果たして実際そのように回答者は考えているのかは, 以後, 回答者に回答理由について掘り下げて聞いてみたい。

以上Yさん（日本人学生，語学研修非参加者），Mさん（日本人学生，語学研修参加者），T君（中国人学生）の間1と問2に対する回答を総合して見ることにする。

「相手との望ましい身体的位置」は，YさんとMさんを比べたら，感覚的にはMさんの方が相手との間隔が狭いことになる。これに関して，これだけの資料で判断するのは不完全ではあるが，語学研修参加者は語学研修非参加者に比べてコミュニケーションの積極性が見られるのは確かである。

一方，Yさん・MさんとT君を比べたら，T君の方は距離を数字で回答していないが，近いと理解して良い。また，中国人学生の回答では同じ1mとの答えが多いが，中国人学生の方がもっと近いと思われる。これに関し，中国人学生は初対面の仲でも，親近感を示すような「人間関係を親しさの度合いの高い関係に設定する」といった文化的土台に築かれる深い観念があり，更に仲が良ければ良いほど相手との距離が近くなると一般的に見られると，認識したい。

それから，「自分が望ましい位置に対して相手が近づいたり遠ざかったりすることにどう思うか」に関しては，日本人学生の場合は，「相手が親しいか親しくないかということ考え方が変わる」のような回答が多く，語学研修参加経験あるか否かでの大きな差はほとんど見られなかった。一方，中国人学生の場合は，相手と親しいか否かという，いわば，心理的距離より，話しやすいかどうかという物理的距離をもっと重視するように結論が付けられよう。

異なる文化では，対人親密度表現に関する価値観による社会行動基準が違い，親近を表す心理が優先するか，又は人に対し距離を保つ配慮を優先するかは初対面会話スタイルの相違に反映され，心地悪さにもつながるのではないかと，続けて検討したい。

5. 結語

以上の調査分析と考察は今回の研究で取り扱う内容とするが，データに対しての更なる考察や図による説明などまだやることが多いほか，前述のように，他に分析に至らなかったデータに関しても大変興味深い考察ができ，また，学生コミュニケーション力指導に有益な研究課題でもあると思われる。他に，一層の絞られた調査が必要と感じられるものもあるが，更に深く掘り下げる考察と理論的検討を含め，次回に続く課題と作業にすることにする。

人々は，社会的営みの中で対人接触をする際，関係している相手に対して，あいさつの仕方や，呼び方，また，話の持ち方や，アプローチ方等々，自分の属する文化への認識を持ちながら対処を選び，発信している。（ト，2005）

会話のスタイルは社会的、場合には個人的文化によって異なるのならば、聞き手は単に自分のスタイルや意図で話し手の意味を解釈し、又は期待すると誤解が生じる。同文化以外の人に対しては、いきなり自分の理解水準で要求し、理解を求めるとは適切ではない。特に高レベルの語学能力を持っている非母語話者に対して、自国文化のコミュニケーション表現における「ルール」や「察し」、また「腹芸」が通用するという認識のミスが生じやすく、場合によっては、これはコミュニケーションの逆効果になる。

鈴木孝夫が名著『ことばと文化』の中(1973, p201)で、日本の「察しの文化」とか「思いやりの文化」は「対象への自己同化」という日本人的美徳に原点があり、この対象同化の心的構造は「甘え」の精神風土にもつながると示唆し、故に、「正面から対立する個と個の間の意見の交換、両者の利害の調節としての言語の機能は極度に抑えられる」可能性を含んでいると指摘した。

異文化コミュニケーションの場合、伝達の目的は「分かち合い」、「伝え合い」であれば、参与者双方の努力と歩み寄りが前提になるといえよう。

(本研究の立案、方向付け、理論と考察はトが、データの収集と分析は主に星見が担当した。)

注

1 (出典) Hall, E. T., *Beyond Culture* 1976, p89

2 芳賀 (1979, p120), ネウストブニー (1982, pp91-96), 田中・田中 (1996, p190)

参考文献 (Alphabet順)

- ト雁 2005 「コミュニケーションと文化」『コミュニケーションの心理学』 吉田章宏・田中みどり 編集 川島書店
- Hall, Edward. T. 1976. *Beyond Culture*, Anchor Press, Garden City, New York
- 芳賀純 1979 「言語行動と心理」『言語と行動 講座言語第3巻』 南不二男 編 大修館書店
- 金文学 2003 『日本人・中国人・韓国人—新東洋三国比較文化論—』 白帝社
- 久米照元・徳井厚子・徐一平 2000 「コミュニケーション様式の日米中比較研究—小集団討論の質的分析を通して—」『平成11年度COE形成基礎研究費研究成果報告(4)』 神田外語大学
- 中山晶子 2003 『親しさのコミュニケーション』 くろしお出版
- ネウストブニー, J. V. 1982 『外国人とのコミュニケーション』 岩波新書
- 重光由加 2005 「何を心地よと感じるか—会話スタイルと異文化間コミュニケーション—」井出祥子・平賀正子編 『講座社会言語科学1 異文化間コミュニケーション』 ひつじ書房
- 鈴木孝夫 1973 『ことばと文化』 岩波新書
- 田中晴美・田中幸子 1996 『言語学への招待』 ミネルヴァ書房

A Study of the Conversation Style Differences in Intercultural Communication:

A Comparison of Japanese and Chinese Students' First Conversation Style (Part 1)

BU, Yan

HOSHIMI, Yuka

One may often be reminded, especially when having cross-cultural contact with ones' own cultural thought, of the unconscious communication.

Students' feedback from guidance sessions indicated that Japanese and Chinese students sometimes feel uncomfortable when approaching each other initially and have difficulties in responding due to their opposing styles of discourse. In order to incorporate such practical experience, we started our research based on a survey which focused on a theoretical inquiry into the differences in the nature of Chinese and Japanese speaking or conversation styles. In other words, our intention is to investigate each of the respective communication modulations and variations.

As recognized universally by cultural theory, China and Japan both belong to high-context culture, but their respective language cultures are very different. Chinese students seem more aggressive than Japanese students in their exchanges for both their approaches and maintaining conversations, while, relatively speaking, Japanese students make fewer efforts. In addition, during conversations deliberate communication control for each person's speech and behavioral approach are different according to their respective view points. The fact, that during practice in first conversations the conversational styles and approaches are uncomfortably different as seen from our survey, can be explained by our basic hypothesis.

Chinese students have shown an affinity for relations even for the people they have met for the first time, which is like a deep idea built on a Cultural Foundation such as that set on a high degree of closeness in human relationships. Furthermore, one may conclude that for Chinese, when the relationship is closer then the distance from the other party is smaller, and their attention is directed more on whether the physical distance rather than a psychological distance, because it is easier to talk.

Also, in the case of Japanese students, when they participation in a foreign language exchange training experience, they show a different activity in response to an aggressive conversation approach to others compared to non-participation.

This research may provide a useful tool for teaching students communication skills. This report discusses some results and suggests some future objectives.

